



図書館が再開した週末早速向かった。休館になる前に借りた本数冊、およそ二月も借りっぱなしだったのを返さなければならぬ。休館と聞いたときは、長編小説を読み急がなくてよくなったと喜んだものだが、それが仇となって結局最初の数ページをめぐっただけで埃をかぶってしまった。手に入れた途端魅力を失ったあれこれと同類にってしまったのだが、そんなつまらぬことで貴重な読書経験を逸してしまつたかもしれない。

定期の図書館行きが叶わなくなると、ぼくの足は本屋に向かうようになった。蔵書の大処分を執行して以来、なるべく本を買わないようにしていたが、新型コロナウイルスにその禁を解かれてしまった。あつと言つ間にこれまで抑制を保っていた蔵書スペースをあふれ出す文庫たち。でも、動線が異なれば出会う本も異なる。図書館では目につかなかつた本を見つけ、自分の読書の傾向にも変化が生まれた。読まずに返すことになつてしまつた本たちの代わりに出合えた本で新しい経験が得られたのならそれもまたよし、だ。

ついでに、にわか購入派になつたことが作用したらしく、住居に関しては賃貸派を自認していたのに、新築しようか、中古を探そうか、マンションは、など考えるようになり、これまで見向きもしなかつた雑誌や

間取りの概説書などを読み漁る。そうなるについつい暴走してしまうのが自分の悪癖で、実家で一人暮らしをしている祖父に家の建て替えを考えているのだが、と提案する。常日頃お前の好きにすればいい、と言っている父が、どう見ても捨てる対象にならざるを得ない物たちへの愛着を語つたりする。てつきり賛成してくれるものと思つていたので、急に足払いを食らつてすつ転んだようなものだ。カッカと熱くなつて梶野狹窄に陥っている自分に気づく。こうなるとさつさと冷めていくのも癖。というわけで仕切り直し。

久しぶりの図書館は、ずいぶん様子が変わつていた。いつもなら開館と同時に新聞の閲覧コーナーは老人たちが占拠しているのに、閲覧禁止でだれもいない。販売機前のソファアード菓子パン片手にゆつたりと時を送る常連さんたちも姿を見ない。椅子は撤去され、机には白布がかかり、殺風景を避けるかのように蔵書が面出しされている。座つて読書などいけません。借りたらさつさとお引き取りください。無言のメッセージ。

毎日新聞を読みに来る老人たちは、今どうしているのだろうか。日がな静かな図書館で時を過ごす異形の風体の人たちは。せめてここに代わる居場所が与えられていきますように。



専業ババ奮闘記(その2) 7

## 木幡智恵美

小旅行(2)

体調は相変わらず良くない。咳に痰、おまけに腹痛まである。大型連休中がかかりつけ医はお休み。何より、葉に頼らず自分の力で治したい。家事以外は努めて横になるようにした。しかし、この時季、畑や実家と伯父の家の周りの草が気にかかる。重い体を引きずつて畑に向かった。夫は刈り払い機での草刈り、私は家の周り、墓、伯父の家の周りと除草剤散布をして、夫が草を刈っている畑に着いた。緑の濃い葉を数枚つけたルバーブの姿を見て、ほつとすける。茎の付け根が赤いのは、元気な証だ。いつも、このルバーブには元気づけられる。来月に迫つた松江での同窓会に、ルバーブジャムを食べてもらえるほど、葉が広がってくれば最高だ。

一息ついてからサヤエンドウを収穫し、もう一つの広い畑に向かう。いつも声を掛けてくれる畑のお隣の家のGさんが、トマトとキュウリの苗をくださった。

家に帰りつくと、倒れるように横になり、テレビの音を聞きながら知らぬ間に眠っていた。大した労働ではないのに、弱つた体にはかなりのダメージだったようだ。

翌日は連休明けで、かかりつけ医は超満員だった。前日の疲れ具合から、迫つてきた小旅行のことが心配になった。自力で治すには時間がない。薬で押さえないと、到底孫たちを連れ歩くことはできそうにないと思つたからだ。

いよいよ旅行が明日に迫つた夕方、寛大と実歩を保育所に迎えに行く。実歩は、車の中で、「うえのどうぶつえんいく」と鼻を膨らませて言う。叔母の家に行く前に、上野動物園に連れていくことにしたのだ。娘からそれを知らされたのだろう。

その日の夕食メニューはビビンバ。寛大の大好物で、いつもおかずを先に食べてご飯には手間がかかるのに、あつという間に平らげた。二人とも体調は良さそうだ。あとは、私が何とか持ちこたえるしかない。

30代フリーター やあ、ジイさん。安倍政権が検察庁法改正の今国会での成立を断念した。野党の抵抗にはいつも強行採決で応じてきたのに。

年金生活者 世論の反発の広がりが、検察を水戸黄門のような正義の味方と考える日本人の伝統的なメンタリティーに根差していることを政権は察知したに違いない。そうした前近代的な心性は、近代的な左派・進歩派に主導された安保法制への反対運動などより手ごわいと政権は感じたはずだ。

悪代官の安倍政権が、水戸黄門の検察に懲らしめられるのを恐れて、ご老公の印籠を奪おうとしており、それを民百姓がとがめた。法改正をめぐる政権と世論と検察のせめぎ合いは、そんな物語にたとえることができる。世論を支えているのは、正義は国民の代表である政治家ではなく、国家から派遣された官僚にあると考える心性と言っている。それは民主主義の理念とは相容れない。官僚が正義から逸脱するかもしれないことを想定し、それを監視

する国民の代表を国家に送り込むシステムが民主制だからだ。

30代 政権を追い込んだ世論に不満なのか。

年金 このてんまつは検察を勢いづかせるだろう。検察OBらの反対表明は検察の意思そのものであり、それがとりあえず通ったことは、検察にとつて政権に対する勝利といえる。それは最悪の場合、いままで何度か見られた検察の「暴走」の可能性を広げる恐れをばらんでいる。小沢一郎を追い落とすために、存在しない事件をつくりあげた陸山会事件、改竄した証拠で村木厚子を起訴した冤罪事件はそうした「暴走」の一例だ。

カルロス・ゴーンを長期拘留した日産の事件では海外から「人質司法」を難じる声が上がった。先進国なら普通にやっている取り調べでの弁護士立ち会いを認めない日本の司法制度は批判にさらされた。その制度を改める権限を託されているのは、国民の代表である国会議員、すなわち政治家だけ

だ。検察への「政治介入」と批判された法改正が先送りされたことが、政治家は検察に一切口出しするなという方向に世論を導くようなことがあれば、「人質司法」を維持したい検察には好都合なことだろう。

30代 「#検察庁法改正案に抗議します」の「ツイッターデモ」は安倍政権のたび重なる行政の私物化にストップをかけた。

年金 ただ、それが水戸黄門を手放しでたたる前近代性を含んでおり、検察に対するノーチェックにつながる危険をはらんでいることは警戒しておく必要がある。

30代 近代的な憲法ができて三四半世紀たつのに、いまだに前近代性が気になるのか。

年金 三上治が日本国憲法を着慣れないよそ行きの着物にたとえていた（テント日誌5月8日版）。自由が憲法の本質なのに、日本人はいまなお「自発的隷従」を民族的心性としているというのがその理由だ。

「自発的隷従」とは、強制によってではなく、自ら進んで国家に服従することだとすれば、それは家族の間での振る舞い方に似ている。夫が妻に、妻が夫に、あるいは子が親に、親が子に従うのは、自発的な動機が大きい。

吉本隆明の言葉を借りれば、「自発的隷従」には共同幻想と対幻想の混交がある。一般的な言い方するなら、公私の区別のあいまいさがある。国家は共同幻想のひとつとして公的な領域に属する。国家と国民の関係は支配と被支配の縦の関係となる。これに対して、対幻想は私的な領域に属し、相互的な横の関係を形成する。

そうした次元を異にするふたつの関係の混交が私たちの国家に存在すると思えば、その理由は天皇制以外に思い当たらない。吉本によれば、古代の大和王権は生き神である天皇を各地の部族に拝ませる代わりに、自らもそれぞれの部族の神を拝むという一種の取引によって、日本列島を支配した。このときの王権と部族の関係は、支配と被

支配の縦の関係だけでなく、それと混交した相互的な横の関係によって成立したと考えることができる。

柄谷行人の交換様式論を理解の助けにしてみよう。柄谷は5つの交換様式を想定し、時代ごとに支配的な様式を入れ替わると考える。もともと古い遊動的な狩猟採集社会では共同寄託（純粹贈与）が、氏族社会では交換様式A（互酬 $\parallel$ 贈与と返礼）が、国家が誕生

ニュース日記 739  
中村 礼治

## 前近代の威力

してから封建制までの社会では交換様式B（略取と再分配 $\parallel$ 支配と保護）が、資本主義社会では交換様式C（商品交換 $\parallel$ 貨幣と商品）が、未来社会では共同寄託（純粹贈与）を高次元で回復する交換様式Dがそれぞれ支配的な様式となる。

大和王権は国家の成立に不可欠の交換様式Bと交換様式Aを混交させたと考えられることができる。王権と部族とが互いに相手の神を拝む関係は一種の互酬であり、交換様式Bの宗教版と言っている。

30代 日本国憲法はふだん着にならなのか。

年金 よそ行きのままでも、それが国家権力を縛る憲法としての機能を発揮しているのは、9条があるからだ。戦争を無条件に忌避する感情は戦後の日本国民のアイデンティティーといっている。それが非戦・非武装という、国家に対する究極の縛りを機能させ、他の条項をも実効性あるものにしていく。